

『十番目の椅子——なっち加入の日』

その日は、風の強い夕暮れだった。雲は薄く引き伸ばされ、沈みかけた太陽が街の輪郭を赤く縁取っていた。石造りの建物の隙間を抜ける風が、路地に落ちた紙片をさらっていく。からから、と。乾いた音を立てながら。

ひとりの少女が、その風に逆らって歩いていた。名前は——なっち。目的地は分かっている。けれど、足取りは、決して軽くなかった。

「……………」

遠くに見える建物。

ヨルファミリア本部。

噂なら知っていた。恐ろしいほど強い総帥がいることその隣には、総帥に絶対的な忠誠を誓う第2席がいること個性的で、強くて、時々どうしようもなく騒がしい者たちが集まっていること。そして何より。



一度「仲間」と認めた者を、簡単には見捨てない場所である
ことなっちは立ち止まった。

「……ほんとに行くの？」

誰に聞いたわけでもない。答える者はいない。だから、自分
で答えなければならなかった。

「……………行く」

小さな声だった。風に消えてしまいそうなほど。それでも、
その一歩だけは、確かに前へ向かっていた。

—

ヨルファミリア本部。その重い扉の前に立つと、なっちは思っ
ていた以上に緊張した。心臓が速い。手のひらが少し汗ばん
でいる。ここまで来た。あとは扉を叩くだけ。なのに、手が
上がらない。

「……………」



怖い。戦うこととは違う。敵なら、まだ簡単だった。勝つか。
負けるか。逃げるか。選択肢は明確だ。でも——

「仲間にしてください」

という言葉には、自分自身を差し出すような怖さがあった。
拒絶されたら。笑われたら。自分には価値がないと言われたら。

「……………っ」

やっぱり帰ろうかな。そう思った。その瞬間だった。ガチャ。

「え」

目の前の扉が、内側から開いた。

「お？」

出てきたのは、あめちゃんだった。二人の視線が合う。

「……………」

「……………」



沈黙。先に口を開いたのは、あめちゃんだった。

「誰？」

あまりにも普通だった。敵意も警戒もない。

「えっと……」

なっちが言葉に詰まる。

「迷子？」

「違います！」

思わず大きな声が出た。

「おお」

「ご、ごめんなさい……」

「いや全然」

あめちゃんは笑う。そして、なっちの背後を見る。誰もいない。もう一度、なっちを見る。

「じゃあ、ヨルに用事？」



「……！」

名前を聞いただけで背筋が伸びた。

「はい」

「そっか」

あめちゃんは扉を大きく開ける。

「入れば？」

「……………え？」

「寒いでしょ」

あまりにも簡単だった。なっちが拍子抜けしていると、あめちゃんが首を傾げる。

「入らないの？」

「……入っていいんですか？」

「ヨルに会いに来たんでしょ？」

「はい」



「じゃ、入らないと会えないじゃん」

「……………」

その通りだった。

「お邪魔します……」

なっちは恐る恐る、ヨルファミリアへ足を踏み入れた。この時はまだ知らない。いつかここへ入る時。

「お邪魔します」ではなく、

「ただいま」

と言うようになることを。

二

想像していた場所とは、少し違った。もっと殺伐としていると思っていた。強者たちが無言で武器を磨き、少しでも隙を見せれば睨まれるような。そんな場所を。けれど――



「いんカス！ それ俺のдаро！」

「名前書いてなかったじゃん」

「俺が置いたの見てただろ！」

「知らなーい」

「返せ！」

「やだね！」

廊下の向こうを、ゆーカスといんカスが走っていった。

「……………」

なっちは呆然とする。別の場所では。

「だから荷物はそこじゃないって」

「ここじゃダメゴマ？」

「邪魔になるでしょ」

「分かったゴマ…………」



レモンに注意されながら、ごま塩が荷物を運び直している。
少し離れた場所では、トムカスが何やら真剣な顔で武器を整
備していた。そして、窓辺には、にゃんこ。その隣にあめちゃ
ん。

「にゃんこー」

「何」

「暇」

「知らない」

「遊ぼ」

「嫌」

「即答!？」

なっちは思った。——普通だ。少なくとも自分が想像してい
た「恐ろしい組織」とは、随分違う。

「ね？」



あめちゃんが笑った。

「変なところでしょ？」

「本人たちの前で言っているんですか？」

「大丈夫大丈夫」

「聞こえてるけど」

にゃんこが冷静に返した。

「ほら」

「大丈夫じゃないですよね？」

「細かいなあ」

「初対面ですよ!？」

なっちの声に何人かが振り返る。

「……あ」

しまった。急に恥ずかしくなる。けれど、誰も笑わなかった。
ただ、新しくやってきた少女を、少し興味深そうに見ている。



「新人？」

いんカス。

「まだ分かんないでしょ」

ゆーカス。

「かわいい子だね」

レモン。

「荷物持つゴマ？」

ごま塩。

「いや今持ってないから」

レモンが突っ込む。なっちはほんの少しだけ、肩の力が抜けた。



三

そして、空気が変わった。足音がした。特別大きいわけではない。けれど、それまで好き勝手に話していた皆が、自然とそちらを見る。廊下の奥。二人の少女が歩いてくる。一人は、まふい。その首には、鍵のついた黒いチョーカー。

静かな眼差し。けれど、その視線は常に、隣を歩く少女へ向いている。そして、その隣。長い黒髪。黒と深紅を基調とした装い。威圧しようとしているわけではない。ただ歩いているだけ。なのに、そこだけ空気の密度が違う。

「……………」

なっちは、息をすることすら忘れた。ヨルファミリア第1席。総帥。

ヨル。

強い。そんな言葉では足りない。目の前の少女が、ここにいる全員の中心なのだと、説明されなくても分かった。

「あ」



ヨルがなっちを見る。

「その子？」

「うん」

あめちゃんが答える。

「ヨルに会いたって」

「そっか」

ヨルが近づいてくる。一步。また一步。なっちの心臓が跳ねる。どうしよう。何て言えばいい。考えてきたはずだった。昨夜から。何度も何度も。

「ヨルファミリアに加入させてください」

それだけ。たったそれだけなのに、

「……………」

ヨルが目の前に立つ。

「こんにちは」



「こっ、こんにちは！」

声が裏返った。

「……………」

「……………」

後ろで誰かが吹き出した。

「笑わない！」

レモンの声。

「ご、ごめん……」

ゆーカス。恥ずかしい。消えたい。

「緊張してる？」

ヨルが尋ねた。

「してません！」

「してるね」



「……………はい」

ヨルが少し笑う。その笑顔を見て、なっちは、ほんの少しだけ呼吸を取り戻した。

「名前は？」

「なっちです」

「なっち」

ヨルがその名前を繰り返す。たったそれだけ。なのに、不思議だった。自分の名前が、いつもより大切なものに聞こえた。

「今日はどうしたの？」

「……………」

来た。言わなければならない。ここまで来た理由を。

「私…………」

声が震える。

「ヨルファミリアに——」



そこで、止まった。

四

怖かった。突然。今まで押し込めていた不安が、全部押し寄せてきた。本当に自分でいいのか。この人たちの隣に立てるのか。強い者たち。互いを信頼している者たち。既に出来上がった輪の中へ、自分が入っていいのか。

「……………」

拳を握る。言えない。そんななっちをヨルは急かさなかった。

「……………」

ただ待っていた。まふいもレモンもあめちゃんもにゃんこも誰も口を挟まない。静かだった。窓の外で、風が木々を揺らす音だけが聞こえる。やがて、ヨルが言った。

「怖い？」

「……！」



図星だった。

「…………はい」

今度は、素直に答えた。

「何が？」

「分かりません」

「そっか」

「でも……」

なっちは俯く。

「ここに入って」

一度、言葉を切る。

「何もできなかったらって」

声が小さくなる。

「皆さんみたいに強くなれなかったら」



「……………」

「役に立てなかったら」

一番怖かった言葉。

「私がここにいる意味が、

なくなるんじゃないかって」沈黙。その時——

「意味なんて後から作ればいいよ」

ヨルが言った。

「……………え？」

なっちが顔を上げる。

「最初から完成してる人なんていないでしょ」

ヨルは続ける。

「できないことがあるなら、できるようになればいい」

「……………」



「時間がかかるなら、かければいい」

「でも」

「なっち」

初めて、ヨルが、まっすぐ名前を呼んだ。

「ここに入りたい？」

「……………」

「強いからとか」

「役に立つからとか」

「そういうのじゃなくて」

ヨルが尋ねる。

「なっちは、

ここにいたい？」

胸の奥で、何かがほどけた。



五

なっちは周囲を見る。あめちゃん。にゃんこ。レモン。トムカス。ゆーカス。いんカス。ごま塩。まふい。そして、ヨル。来たばかりなのに、ほとんど何も知らないのに不思議だった。この場所で、皆が笑っている景色を。

もっと見たいと思った。この人たちが帰ってくる時、自分もここにいたいと思った。いつか。任務へ出る時。当然のように、自分もその中にいたい。そして、ヨルが歩き出した時。その背中を、もっと近くで見たい。胸の奥から、

言葉が出てきた。今度は、震えていなかった。

「いたいです」

ヨルが静かに聞く。

「うん」

「私」



なっちは、まっすぐヨルを見る。

「ここにいたいです」

一瞬。静寂。そして、ヨルが笑った。

「じゃあ決まり」

「……………え？」

「よろしく、なっち」

「……………」

理解が追いつかなかった。

「え？」

「よろしく」

「えっ」

「三回目いる？」

「待ってください！」



なっちが慌てる。

「試験とか！」

「後でいいよ」

「面接とか！」

「今したようなもんじゃない？」

「もっとこう……！」

「何？」

「覚悟を確かめたり！」

ヨルが首を傾げる。

「今、聞いたよ？」

——ここにいたい？ たった一つ。その問い。

「……………」

なっちは言葉を失う。



「ようこそ」

ヨルが手を差し出した。

「ヨルファミリアへ」

なっちはその手を見る。細い手。けれど、不思議なくらい、力強く見えた。恐る恐る。握る。温かった。

「……………はい！」

その瞬間、なっちはヨルファミリアの一員になった。

六

「新入りゴマ！」

ごま塩が最初に来た。

「よろしくゴマ！」

「あ、よろしくお願いします」



「荷物は任せるゴマ！」

「私が持ってもらう側なんですか？」

「ごま塩の仕事だから」

レモンが笑う。

「私はレモン。よろしくね」

「よろしくお願いします！」

「そんな固くならなくていいよ」

続いて、ゆーカスといんカス。

「よろしく」

「よろしくー」

「どっちがどっちですか？」

「俺がゆーカス」

「俺がいんカス」



「分かりました」

「多分明日には間違える」

「なんですか！？」

少し離れた場所から。トムカスも、

「よろしく」

と短く声をかけた。にゃんこは、

「よろしく」

それだけ。けれど、その隣から。

「ねえねえ、なっち！」

あめちゃんが飛んでくる。

「はい？」

「何歳？」

「え？」



「好きな食べ物は？」

「えっと」

「猫好き？」

「なんで猫限定なんですか？」

「にゃんこが好きだから」

「私関係ないでしょ」

「あとで部屋見せるね！」

「一気に喋らないでください！」

騒がしい。本当に騒がしい。でも、嫌じゃなかった。その輪の中に、自分の声が混ざっている。それが嬉しかった。そして、最後。まふいが近づいてきた。

「なっち」

「は、はい」



緊張する。ヨルとは違う意味で、まふいには、近寄りがたい
静けさがあった。

「一つだけ」

「はい」

まふいは、なっちを見る。

「ヨルを裏切らないで」

空気が、ほんの一瞬だけ冷たくなった。

「まふい」

ヨルが後ろから呼ぶ。

「怖がらせないの」

「怖がらせてない」

「怖いよ」

「普通」

「まふい基準でしょ」



二人のやり取りを見て、なっちは、思わず笑った。

「あ」

自分でも驚いた。まふいがこちらを見る。

「……何？」

「ご、ごめんなさい！」

「別に」

そう言いながら、まふいもほんの少しだけ、表情を柔らかくした。

七

その日の夜。なっちは、新しく与えられた部屋にいた。小さな部屋。ベッド。机。椅子。窓。まだ。自分の物はほとんどない。静かだった。昼間の騒がしさが嘘のよう。ベッドに腰掛ける。



「……………」

今日一日を思い返す。扉の前で、帰ろうと思ったことあめちゃんに見つかったこと皆と出会ったこと。そして、ヨル。——ここにいたい？あの言葉。なっちは胸元に手を置いた。

「……………変な人」

総帥なのに、もっと怖い人だと思っていた。もっと遠い人だと思っていた。でも、なっちが言葉を出せなくても、待ってくれた。弱さを話しても、笑わなかった。役に立てるかどうかではなく、

「ここにいたいか」と聞いた。

なっちは窓の外を見る。月が出ていた。今日から。ここが自分の居場所になる。まだ。実感はない。だけど、胸の奥には、小さな火が灯っていた。いつか。あの人の役に立ちたい。強くなりたい。認められたい。そして、いつの日か。

胸を張って、あの人の隣に立てるくらいに。

「ヨル……さん」



小さく呼んでみる。まだ。その呼び方だった。

「……………」

何となく、違う気がした。でも、他の呼び方なんて知らない。この時のなっちは、まだ知らなかった。やがて、その憧れが、敬愛へ変わることを。そして、いつしか自然に心の底から、彼女をこう呼ぶようになることを。

「お姉様」

と。

終章 十番目の椅子

翌朝。朝食を終えたなっちが、円卓会議室〈椅子の部屋〉へ向かうと皆がいた。

「おはよー、なっち！」

あめちゃん。



「おはよう」

にゃんこ。

「よく眠れた？」

レモン。

「朝の荷物も任せるゴマ！」

ごま塩。

「朝から何運ぶの？」

「気持ちゴマ」

「意味分かんない」

昨日まで、自分のいなかった景色。その中に今日は、自分の席がある。円卓を囲む。十番目の椅子。なっちは、そこへ座る。

「……………」

ヨルが気付いた。



「おはよう、なっち」

「……おはようございます！」

たった一言。それだけで、少し嬉しくなった。まだ第10席。まだ何者でもない。自分がどこまで強くなれるのかも、何ができるのかも分からない。未来なんて、何一つ決まっていない。それでも、一つだけ。

昨日までとは違うことがある。

帰ってくる場所ができた。

そして、その場所には追いかけていたい背中がある。なっちは十番目の椅子から、一番目の席を見る。ヨルは、いつも通りそこにいた。遠い。まだ、とても遠い。だからこそ。なっちは小さく笑った。いつか。もっと近くへこの日。

ヨルファミリアに、十人目の仲間が加わった。第10席——なっち。後に誰より親しみを込めて、総帥ヨルを、

「お姉様」



と慕う少女。これはまだ、その呼び名さえ生まれていなかった頃。彼女が初めてヨルと出会い、十番目の椅子に座った、記念すべき一日の物語。そして、ヨルファミリア十席が、ついに揃った日でもあった。窓から差し込む朝日が、

十脚の椅子を照らしている。一番目から。十番目まで、もう。空席はない。

「なっち」

「はい？」

「今日から忙しくなるよ」

ヨルが笑う。なっちは一瞬だけ驚き。それから、昨日よりずっと自然に笑った。

「はい！」

この時、なっちはまだ加入したばかりだった。けれど、物語において、

最後に加わった者の物語が、小さいとは限らない。



十番目の椅子から始まる彼女の物語は、この日。ようやく、
最初の一頁を開いたのだった。

END

